

日本体育学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.19(4), February, 2016

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 第3回定例研究会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

絶望の淵から這い上がって

樋口 聡 (広島大学)

私は、2013年の12月に、脳出血で倒れました。幸い大学に復帰することができましたが、左半身麻痺の身体障害者となりました。それに先立ち、私は2010年の2月に一度倒れています。チャージ・ストラウス症候群という非常に珍しい病気でした。先のソチ冬季オリンピックで、男子ジャンプ団体で銅メダルを取った日本チームの竹内択選手が患っていたことを告白して、一時話題になった難病です。今は、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症と呼ばれています。自己免疫が破綻をきたす病気です。

研究成果が豊かに実るはずの50代に、なぜ私は二つの大きな病気で叩きのめされなければならないのか、苦悶いたしました。どちらの病気も、なぜ私とその病気になったのか、はっきりした原因が分かっていません。よく「過剰なストレス」と言われました。確かに、世界を飛び回って、いつも3つほどの締め切り原稿を抱え、5人もドクターの学生がいて…、土日のないような生活が続いていました。しかし、それが深刻なストレスだと言うのなら、体育哲学の多くの先生方も倒れなければならないことになってしまいうでしょう。要するに、私は弱く、運もなかった、ということでしょうか。

二つの大病は、大きな不幸として目立っていますが、私は、その大きな不幸の周りに、容易には気づかないたくさんの幸福があることを、闘病の中で教えられました。脳出血で倒れた日の3日後、韓国出張が入っていました。もし韓国に行っているときに倒れたら、大変なことになっていたでしょう。そうはならなかったことは、まことに幸運でした。私は幸運なのです。この幸運 (Glück) を幸福 (Glücklichkeit) に変えることが美の力である、なんていうことを、かつて論じたことがありました (『スポーツの美学』)。このようにして、昔のことをよく思い出します。

昨年8月に国士舘大学で開催された体育学会に出席できたことは、夢のような出来事でした。そこでも、過去を振り返ることが多々ありました。ダンスのシンポジウム。「振付け」の特権化とそれへのこだわり、歴史的背景はどんなものだったのだろうか。「M・サーリッジ及びA・アーミゴラスとJ・マーゴリスの舞踊表現論」といった尼ヶ崎紀久子さんの1980年代の古い論考の想起。コンタクト・インプロヴィゼーションのスティーヴ・パクストンとの出会いと対話の思い出…。

私の研究室に眠っている大量の研究資料や研究メモ。そうしたものを引っ張り出しては、かつての自分と向き合い、それらを論文や著書の形にしていくこと。そんなことが、ひと

まず私ができることでしょうか。論理的思考能力は障害を受けなかった、その幸運＝幸福をかみしめ、絶望の淵から泥臭く這い上がりたいと思います。「感性教育」について研究を継続・発展させることが、当面の課題です。「スポーツの美学」のその後についても、若い研究者諸君と楽しく対話ができたらな、と思っています。私は、皆さんの「若さ」から大きなエネルギーをもらっていることを実感しています。

私も若い頃、競技や学問に真摯に向き合っていました。いろんなことがありました。どのようなものであれ自分の経験に真摯に向き合うという点は、これまで一貫してきたように思います。私の病気は完治ということはありません。いろいろな不具合が出てくるかもしれません。傷つくこともあるかもしれません。「悲しみの花の後からは、喜びの実が実る」という詞を胸に踏ん張ります。これからが、本当の勝負の時なのかもしれません。

樋口聡 (higuchis@hiroshima-u.ac.jp)

体育哲学考

「体育哲学」の隠された次元

木庭 康樹 (広島大学)

「オメラスの都」をご存じだろうか？

ここではないどこか遠い場所に、オメラスと呼ばれる美しい都がある。人々は精神的にも物質的にも豊かな暮らしを享受し、誰もが「心やましき」など抱くことなく、子供達はみな人々の慈しみを受けて育ち、大人になって行く。素晴らしい街、人の思い描く理郷、オメラス。

しかし、そのオメラスの平和と繁栄のために差し出されている犠牲を知るとき、現実を生きる「われわれ」は気付くのだ。この遙か遠き理想郷は、今「われわれ」が立っているこの場所のことなのだ。オメラスが求めた犠牲。それはこんな姿をしている。

オメラスの美しいある公共建造物の地下室に、でなければおそらくだれかの宏壮な邸宅の穴蔵に、一つの部屋がある。部屋には錠のおりた扉が一つ、窓はない……その部屋の中に一人の子どもが坐っている……その子はもとからずっとこの物置に住んでいたわけではなく、日光と母親の声を思い出すことができるので、ときどきこう訴えかける。「おとなしくするから、出してちょうだい。おとなしくするから！」……その子は脚のふくらはぎもなほほど痩せ細り、腹だけがふくらんでいる。食べ物は一日に鉢半分のトウモロコシ粉と獣脂だけである。その子はすっ裸だ……そのわけを理解している者、いない者、それはまちまちだが、とにかく、彼らの幸福、この都の美しさ、彼らの友情の優しさ、彼らの子どもたちの健康、学者たちの知恵、職人たちの技術、そして豊作と温和な気候までが、すべてこの一人の子どものおぞましい不幸に負ぶさっていることだけは、みんなが知っているのだ。

原文は、アメリカの女性作家アーシュラ・K・ル・グィンの短編集『風の十二方位』に収められた「オメラスから歩み去る人々」による〔1980年、早川書房、470-472頁〕。この物語は、ル・グィンがドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』第五編の五「大審問官」の場面から着想を得て描いたものであるが、数年前、マイケル・サンデルの『これからの「正義」の話しよう』の中でこの物語が引用されて有名になり、最近では日本の人気サスペンスドラマにも寓話として登場する。

とりわけ、上の引用の最後には、「学者たちの知恵」という言葉があるように、「われわれ」学者もまた「オメラスの都」の地下室にいる子供に犠牲を強いながら、自らの「幸福」に甘んじているのではないか。

繰り返そう。「オメラスの都」、この遙か遠き理想郷は、今「われわれ」学者が立っているこの場所のことなのだ。

では、オメラスが求めた犠牲。すなわち、「われわれ」学者が犠牲を強いているもの、あるいは言い換えるなら、「体育哲学」の隠された次元とは、いったい何であるのか。

自覚のある方なら、もうお分かりだろう。

もしも現実の体育実践が、あの「オメラスの都」の地下室に閉じ込められている子どもだとしたら、「われわれ」は、その子を「まなざす」だけでなく、その子が「われわれ」へと向け返す「まなざし」に耐え得ることができるだろうか。その子に対するように、現実の体育実践に対して面と向き合い、「心やましき」なく接することはできるだろうか。

文字通り「オメラスから歩み去る人々」の物語の最後には、地下室に閉じ込められた子であることを知らされ、この子の姿を見たあと、まれにこの「オメラスの都」から姿を消してしまう人々がいると言われている。その人々は、この子を知った直後、あるいは、それから何年も経ったある夜、身の回りのものだけを持って、静かにオメラスから歩み去っていくのである。

「われわれ」学者が、自らの幸福の追求に汲々とするのではなく、「われわれ」の足下にある体育実践をしっかりと見つめ、「体育哲学」が制度として自らの枠組みに閉じ込めているその体育実践から逆に「まなざされている」ことを真摯に受け止められるかどうか、そして、実際の行動を起こせるかどうか、この「オメラスから歩み去る人々」が「われわれ」に対して投げかけている問いなのである。

自らの覚悟と自戒の意味も込めて、そう解しておきたい。

木庭 康樹 (kiniwa@hiroshima-u.ac.jp)

書籍紹介

Mabel E. Todd (2008) *The Thinking Body: A Study of the Balancing Forces of Dynamic Man*. The Gestalt Journal Press.

福本 まあや(お茶の水女子大学)

この本の初版は1937年で、上に挙げたものはその初版無修正版です。かなり古い本ですが、著作権が移譲されながら再版が重ねられ、米国のソマティック教育界の古典中の古典と見受けられます。つまみ食い（読み）でも興味深いと思いましたので、紹介させていただきます。

ご存知の方も多いかもしれませんが、著者トッド(1880-1956)は広義の意味でのイデオキネシスというボディワークの創始者です。（“イデオキネシス”の命名者は、トッドの弟子スウェイガードで、日本ではスウェイガードの著書『動きの教育』を通して「観念運動学」として紹介されています。）イデオキネシスの特徴は、運動学習におけるイメージ、呼吸、内受容感覚への気づきの重要性を指摘し、習慣化した非効率的な動き—例えば立位姿勢や歩行といった日常の動作から跳躍や回転など訓練を要する動きまで—の再教育には、適切な図像を思い描くこと、つまりイメージが有効だとした点にあります。

本書は、特に米国のボディワーカーや舞踊家らに影響を与えてきている本で、彼らの著述を読み解く上では必携の本だと言えます。また、トッドは序文で、「本書の一部は、元は

コロンビア大学教育学部学生のためのシラバスとして準備されたもの」で、ここに著された考えは「30年以上にわたる身体の効率的な使用 (bodily economy) についての指導の経験から導き出されてきたもの」「本著ではリラクゼーションとは何かを考え、それに組み合わせる方法を本著で紹介する」と述べています。トッドは本文において自らの試みを「構造的健康法 (structural hygiene)」とも呼んでいます。こうしたことから、この本は大学体育などの文脈で身体について語るうえでも、興味深く参考になる本ではないかと思えます。

本文の構成は次の通りです。第1章：人間のダイナミクスにおける機能と形状，第2章：反応するメカニズム，第3章：機械的に加わる力・機能上の適応・構造の変化，第4章：機能する骨格，第5章：ダイナミックなメカニズム，第6章：直立のために力のバランスをとること，第7章：歩行時にバランスがとられる力，第8章：呼吸，第9章：内受容感覚系，第10章：生理的なバランスとアンバランス。これらに加えて目次，図表一覧，文献一覧，索引があり，また本文中には91の解剖図や実践のためのイラストがあります。

書名のサブタイトルや各章の見出しからも分かる通り，この本は，生きて動く人間の，主に骨格構造について，当時の解剖学，生理学，力学，神経科学などの理論に基づき説明しています。加えて，そうした身体の構造が，地球上の生命の進化のプロセスにおいて外界からの力に応答する中で形成されたことや，人間の行動が，いかに情動や先入観によって影響を受けるものであるかを指摘しています。

例えば1章1節「身体の状態」には次のように述べられています。「行動はほとんど合理的なものではない，それは習慣的で感情的なものである。(…)自己を表現する中で，精神と感情の素養，気質，個人の経験と先入観が，全身の部分間の関係に影響を与え，またそれらをコントロールしている」(pp. 1-2)。また2章5節「姿勢における条件づけられた反射」には，「動物は姿勢に対して無意識であるが，人の姿勢に対する態度は，どのように見てもらうべきかという先入観によって大きく決定される」(p. 34)とあります。ひたすら振付家の動きを見て反復練習をすることで慢性疲労から障害に至ったモダンダンスラーらが本著によって開眼し，自らの身体と心の探究に向かったことは想像に難くありません。

タイトルにある「思考する身体」とはつまり，意識以前の時代から外界の力に応答しながら生命の形を形成し，内部の動的均衡状態を保つ営みを賢くも続けてきている身体の在り方を表したものと考えられます。著者トッドの経歴やイデオキネシスについては，サイト <http://www.ideokinesis.com/> もご参照ください。賢くも続けてきている身体のことを表したものと考えられます。

福本 まあや (fukumoto.maaya@ocha.ac.jp)

私の研究

オリンピックが目指す「平和」の意義と方向性に関する研究

—イマヌエル・カントの平和思想を手掛かりとして—

野上 玲子 (日本体育大学大学院)

「ペンと本で世界は変わる」ノーベル平和賞を17歳で受賞したマララ・ユスフザイさんが，2013年の国連演説で語った言葉です。世界中の子どもたちや女性がペンと本を持ち，教育を受ける権利と重要性を訴えました。スポーツ界に身を置く研究者や指導者にとっても，スポーツが教育・平和にどのように貢献できるかは，常に大きな課題と言えます。2020年，最大のスポーツイベントであるオリンピックを開催する日本は，どのような使命を持

って取り組むべきなのでしょうか。

日本は大会開催の気運が高まっていると同時に、戦後 70 年を迎え、「平和」な社会に対する展開のターニングポイントに直面しています。このような状況の中で、今、改めてオリンピックにおける平和とは何か、問い直す時期にきていると言えましょう。そこで本研究では、カントの著作『永遠平和のために』の中の平和思想を援用し、2020 年大会を控える日本はどのような平和を創造できるかを長期的な視点で捉え、博士論文はその一事例として成果をあげることを目的としました。

カントは『永遠平和のために』の中で、六つの予備条項と三つの確定条項を展開しています。多数の研究者の見解では、「カントの先見性を感じる」という意見もあれば、その一方で、「理想主義で実現不可能」と記された内容もあります。現実社会に即して考えると、「永遠平和」の実現は不可能に思われるかもしれませんが、しかし、カントは最後に「永遠平和という目的に向かって努力することが、われわれの義務となっているのである」と述べていることから、最終的には私たちが永遠平和に向かう義務とは何かを判断し、その実現に向かって努力することを委ねているように思われます。さらに、『道徳形而上学原論』や『判断力批判』などの著書から「義務」や「尊敬」についても、カントが示す形式および法則を丁寧に腑分けして読み進め、キーワードの裏付けとなる理論を提示し、オリンピックへの応用可能性について考察していきたいと考えます。

平和概念を追求する中で、「平和」と対極にあると考えられる「暴力」、そして肯定的／否定的な価値を持つ「競争」は、重要なキーワードになることは間違いありません。ヨハン・ガルトウングの「構造的暴力」の概念や、ハンナ・アーレントの「権力と暴力」の思想から多くの示唆を得ることができます。カントの政治哲学に影響を受け、ナチスの強制収容所からアメリカへ亡命したユダヤ人哲学者であるアーレントは、「暴力」は個人の力の延長として存在し、個人／集団のどちらによっても行使されるが、集団レベルでの「暴力」には「権力」の付与が先行する。つまり「暴力」のみで成立する共同体は原則存在しないと示し、「権力」は通常「暴力」の上位にあるという見解を述べています。まさに、政府という最大の権力を持ったロシア陸上界の組織ぐるみのドーピングは、選手だけではなく、コーチ、医師、検査機関における暴力の横行であったと言えましょう。政府が選手を国の広告塔として介入するようでは、大会の意義が見失われてしまいます。

現段階では、カントの自然の諸条件から成り立つ平和思想に基づき、オリンピズムにおける普遍的な基盤として援用した結果、「歴史の再認識」、「競争」理念の共存と競争相手の尊重」、「競争」を通じて、「努力」すること、という平和へ導く新たな理念を創造することができました。今後、オリンピックをどのように変革・刷新し、オリンピックだからこそ達成できる「平和」とは何かについて検討することが課題となり、より一層研究活動に励んでいく所存です。

最後になりますが、カントやオリンピック研究に関して、現時点ではまだ駆け出しの状態です。多くの先生からご指導ご鞭撻を賜ることができれば幸いです。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

野上 玲子 (15n0007@nittai.ac.jp)

運営委員会より

釜崎 太 (明治大学)

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします。現在、下記の URL にて HP を公開しております。これに関するご意見もお寄せ下さい。 <http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

○専門領域メーリングリストへのご登録のお願い

新しいメーリングリスト「Freem1」(<http://www.freem1.com/>) の運用を開始しております。メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。グループへ参加するには、総務担当:高橋浩二(takahashi@nagasaki-u.ac.jp) までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。

○体育・スポーツ科学情報コラムの発行について

日本体育学会企画による『体育・スポーツ科学情報コラム』が発行され、全ての専門領域から情報コラムが寄せられています。下記の URL にてコラムが公開されておりますのでご覧ください。 <http://taiiku-gakkai.or.jp/column>

釜崎 太 (kamasaki@meiji.ac.jp)

定例研究会のお知らせ

阿部 悟郎(仙台大学)

平成 27 年度第 3 回定例研究会 (大学院セッション) を 2016 年 3 月 5 日 (土) に下記の要領で開催いたします。なお、研究会終了後 18 時 30 分より懇親会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。

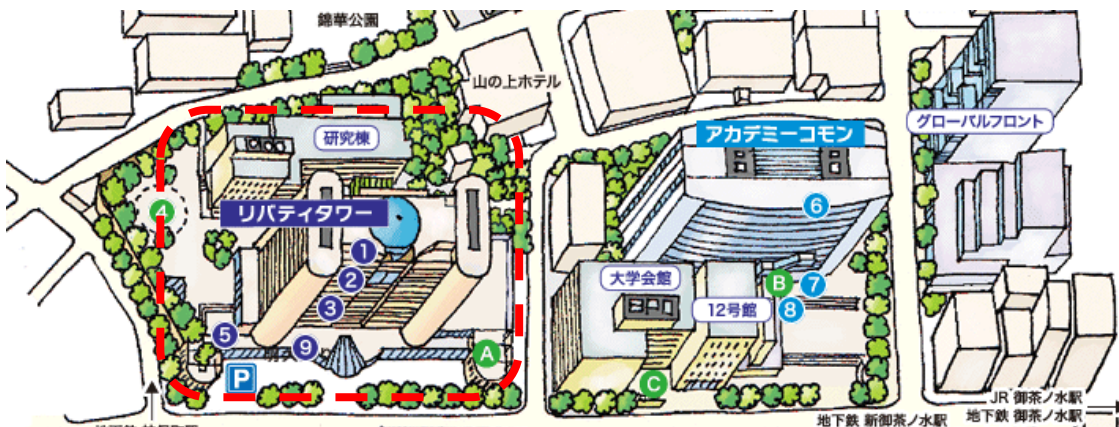
- ・日 時：2016 年 3 月 5 日 (土) 15:00～18:00 (15 時より開場)。
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リバティータワー・12 階 1124 教室
詳細は下記 URL をご参照下さい。

http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/6t5h7p000001h0z0-img/720_campus_suruga.gif

JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分

東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分

都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



【発表①】 植木陽治（筑波大学大学院）

遊びの意味からみる日本的スポーツの特質 —ことばの意味に着目して—

従来の日本人のスポーツの特質（日本的スポーツの特質）として、遊びの欠如が指摘されてきた。しかしこの際、多くの論者がホイジンガ等に代表される西洋の遊び論をもとに、日本人の遊びの欠如を論じているという問題を指摘できる。つまり、日本人は日本語独特の認識や解釈に縛られているとも捉え得るのであり、日本語の「遊び」そのものの意味を追究する必要があるのである。本発表では、この日本語の「遊び」に特殊な意味を明らかにすることを通じて、従来指摘される遊びの欠如という日本的スポーツの特質を、再度検討していくことを試みる。

【発表②】 佐藤大樹（筑波大学大学院）

スポーツ実践者の存在の意味—スポーツにおける時間体験の分析を通じて—

スポーツにおいて、実践者はいかに存在しているのだろうか。スポーツ実践という営みが時間とともにあるということを踏まえるならば、それは時間という観点から解明することができるように思われる。そこで本研究においては、M.ハイデガーの『存在と時間』における存在論を援用しつつ、時間の流れの遅速を様々に感じるような体験、すなわち時間体験の分析を通じて、スポーツ実践者の存在の意味を明らかにすることを試みる。そのことによって、これまであまり語られることのなかった、時間という観点からみたスポーツ実践者の存在の意味が明らかにされよう。

阿部 悟郎 (gr-abe@sendai-u.ac.jp)

次号予告！

次号は本専門領域の研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は河野清司 (konok@sgk.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第19巻第4号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
舛本 直文（会長）
編集者 杉山 英人（広報委員長）
発行日 平成28年2月15日
連絡先 〒263-8522 千葉県稲毛区弥生町1-33
千葉大学教育学部 043-290-2616（直通）
アドレス：hidetohsk@faculty.chiba-u.jp

【編集後記】

今回の会報では、病気と闘いながら研究の継続・発展を目指されている研究者、体育・スポーツについて常に哲学的に考察している研究者、体育哲学関連の洋書の分析にも取り組んでいる研究者、研究の成果をまさに発表しようとしている研究者、それぞれの研究に対する真摯な取り組みが表現されています。

今年度も数多くの先生方に会報の記事をご執筆いただき、会員の方々に様々な情報を提供することができましたことに、心から感謝申し上げます。今後も会報という形式を通して貴重な情報をご発信いただければ幸いです。(K)